

「人もをし人も恨めしあぢきなく」考

——『百人一首』九九番（後鳥羽院）を読み解く——

光 岡 優 花

はじめに

『百人一首』の存在を知らない、その名を聞いたことが無い人はほとんどいないだろう。なぜなら、『百人一首』は様々な文化として再生され、またかるたなどで幼少期から親しんでいるからである。現に私も『百人一首』との出会いはかるたである。そして和歌は三十一文字だけで構成されるものであり、この少ない文字で多くの想いを伝えている。私は本稿で『百人一首』を取り上げるが、中でも『百人一首』と関係が深いとされる『百人秀歌』ではなく、『百人一首』には撰ばれた後鳥羽院の和歌に焦点を当ててみたい。なぜこの歌が撰ばれたのか、数多く詠まれた後鳥羽院の歌の中でも藤原定家はなぜこの一首を撰んだのか。この疑問を解決してみたい。

人もをし人も恨めしあぢきなく世を思ふゆゑにも思ふ身は
（人が愛おしくも、また、恨めしくも思われる。この世を思っているからこそ、無益なことにも、私の身は様々な物思いをしてしまうのだ。）

この歌は建暦二年（一二二二年）十二月の二十首御会で、「述懐」という題で詠まれた歌である。なぜ藤原定家は数ある後鳥羽院の歌の中でこの一首を撰んだのか。その理由を考察するために、歌に使われている単語「をし」「うらめし」「あぢきなし」に注目して考察する。藤原定家や後鳥羽院の他の歌の用例を検証し、最終的には、藤原定家が『百人一首』の後鳥羽院の「人もをし」の歌を撰んだ理由に迫り、自分なりの結論を導きたい。

一 「人もをし」

さて、早速後鳥羽院の和歌の表現を丁寧^①に検証していきたい。

まず最初に「をし」を取り上げる。「をし」とは『小学館 古語大辞典』によると、

愛するあまり捨て難い。手放しにくい。もつた^②くない。名残惜しい。残念だ。^①

とある。漢字表記では「愛し」と「惜し」の両方があることから、愛する、愛おしさの意味もあれば、残念がり、名残惜しいという意味もあることが分かる。また、「あたらし」も「惜しい（もつたくない）」という意味を持つ単語であるが、「をし」には愛しくも心惜しい思いを含ませていることから「をし」のように二つの意味を併せ持ち、かつ「をし」に近い「かなし」について意味と用例を挙げる。「かなし」とは、同じく『小学館 古語大辞典』によると、

【愛し】①（肉親や男女などの間で）身にしみて愛おしい。かわい^②い。②心が強く引かれて、感興を催すさま。心にしみて面白い。③みことだ。すばらしい。【悲し・哀し】①心が強く痛むさま。しみじみ嘆かわしい。痛ましい。哀れだ。②心こたえるさま。悔しい。残念だ。③（経済的に）気苦労が多い。

貧しい^③。

とある。用例と現代語訳（ことばの意味に関わる論のため、先行注釈書をふまえて、以下現代語訳を付す）を挙げてみよう。

鳴きよはる野原の虫の声聞けばわが身の秋ぞいとどかなしき

（後鳥羽院御集 秋）^③

（秋の終わりが近づき鳴き弱っていく野原の虫の声を聞くと、私の秋への思いはなおさらに愛しく、悲しいものになってしまった。）

この歌の本歌は、

鳴き弱るまがきの虫もとめがたき秋の別れやかなしからむ

（千載和歌集 離別 紫式部）^④

（私もあなたとの別れがづらいが、鳴き弱っているまがきの虫もまた、去っていく秋との別れが悲しいのだろうか。）

である。秋の終わりに段々と弱っていく虫の「鳴き」声に自身の「泣き」を掛け、虫の秋との別れに自身の友人との別れを掛けているのだ。歌の詞書に

遠所へまかりける人のまうできて、あか月帰りけるに、九月
尽日虫の音もあはれなりければよみ侍る

とあるように、両親の地方赴任の都合で別れることとなってしまった友人への想いを詠んだ歌である。参考歌として次の一首を

引く。

もろともに泣きてとどめよきりぎりす秋の別れは惜しくやは
あらぬ (古今和歌集 離別 藤原兼茂)⁵⁾

(「おろぎよ、私たちと一緒に鳴いて(泣いて) 去る人を引き留めてくれ。おろぎは秋との別れが悲しくないのか、いや、私は別れが悲しい。)

秋との別れの季節に人とも別れなければならぬ悲しい思いを、弱っていく虫の鳴き声に託した歌である。「きりぎりす」は現在の「おろぎのことである。秋が終わるということは「おろぎの命も終わってしまうため、秋との別れは惜しいものでないのかと問うている。この歌のように、紫式部や後鳥羽院は虫と秋の別れの悲しみを重ねることで悲秋を表現しているのであろう。

しかし、「わが身の秋」の部分は、次の歌をふまえているのではないかと稿者は考える。

月見ればちぢにものこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあ
らねど (古今和歌集 秋上 大江千里)⁶⁾

(月を見てみると、私の思いは千々に乱れ、なんとなく悲しい気持ちになる。秋は私一人のためだけにあるものではないのに、悲しい思いがすることだ。)

白楽天の詩をふまえ、「千々に」と「ひとつの」を対比させた構

成の歌である。秋、月を眺めながら悲哀を感じてしまうのは当然の心情であり、秋は自分だけに来る季節ではないと知ってはいるものの、なぜかその秋の季節に自分だけがあると感じてしまうほど悲しい気持ちを表現している。

この歌をふまえて後鳥羽院の「鳴きよはる」の歌を考えると、「鳴きよはる野原の虫の声聞けば」は、秋の終わりで弱っている虫の様子であるが、自身の命の終焉を暗示しているようにも受けとめられる。本歌と参考歌から、秋の終わり頃の虫の音は、秋との別れを一層惜しいものにするのが分かる。死に向かつていく虫と自分、秋と別れてゆく虫と、現世と別れてゆく自分をリンクさせ、秋への愛しみと悲しみの両方を感じさせている。

その他にも後鳥羽院の「かなし」の歌は何首かあり、秋や我が身の荒廃を嘆く歌が多い。「かなし」は愛しさと悲しさ両方の感情を表し、「をし」は愛しさゆえの残念さ、手放しがたい思い、つまり感情は一つであるが、その感情の根底には愛しさがあることを表しているのではないかと考えている。そのため、後鳥羽院は「人もをし」歌では「人」に対して「かなし」に含まれる悲しさ、残念さの感情ではなく、「愛しさがために離しがたい」という愛しさ故の思いがあったからこそ「をし」と表したのではないだろうか。

さらに、後鳥羽院は「人もをし」歌で「人」について、「をし」

だけでなく「うらめし」とも書いてある。あえて「をし」と「うらめし」と分けたことにも理由があるだろう。「をし」と「うらめし」の違いについて、次節の「うらめし」の考察をふまえて結論付けたい。

二 「うらめし」

次に、「うらめし」について考察する。「うらめし」とは、『小学館 古語大辞典』によると、

動詞「うらむ」の形容詞化。恨みに思うさま。残念だ。不満だ。
「うらむ」とは、

- ① 恨みに思われる。不満に思う。非難する。② 恨み言を言う。文句を言う。③ 恨みを晴らす。⁽⁷⁾

とある。「うらめし」を用いた歌の用例を引用しよう。

▽後鳥羽院の「うらめし」

後鳥羽院の「うらめし」の用例を検討しよう。

まちかぬるさ夜のねざめの床にさへ猶うらめしき風の音かな

(後鳥羽院御集 恋 後鳥羽院)⁽⁸⁾

(恋人を待ちかねて諦めて寝ていたというのに、夜中に目が覚めてしまった。吹いている風の音によってなおさら恨めしく感じられることだ。)

ただでさえ待っていた恋人が訪れず恨めしく感じていたというのに、さらに風の音によって目が覚めてしまい、恋人と風の音への二重の恨めしさを表現している。

かへる雁かすみのうちに声はして物うらめしき春のけしきや

(後鳥羽院御集 春 後鳥羽院)⁽⁹⁾

(春が終わり、北へと向かっている雁の声がかすかに聞こえる。別れを告げられた春は悲しげで、恨めしげな様子である。)

春の季節を人に喩えた擬人化の歌である。雁は春が終わると北へと渡って行ってしまう。霞がかかった空でかすかに雁の声が出ている。季節の終りとともに別れなければならない春の思いを表現した歌である。

いへばえにかはらに月ぞうらめしき我のみふかきこけのたもとに
(後鳥羽院御集 雑 後鳥羽院)⁽¹⁰⁾

(言おうとしたが言えず、言わずにいると自分の中で思い乱れてしまうことであるが、自分は出家し今は僧侶として生き、昔とは変わってしまったのに、月は昔も今も変わらず存在していることが恨めしく思う。)

「昔の袂」とは、黒染めの衣の袂、つまり僧侶の衣のことを指す。月は今も平然と世を照らしている。なのに自分は出家し、以前の自分とは変わってしまった。本歌は『伊勢物語』三十四段の、素っ

気ない態度をとる女に贈った（むかし、つれなかりける人のもとに、）歌である。

言へばえに言はねばむねにさわがれて心一つに嘆くころかな

（伊勢物語 三四段）^①

（口に出して言おうとしたが言えず、言わなければ胸の中で思い乱れてしまい、自分の心の中でだけで嘆くばかりのこの頃であることよ。）

素っ気なくつれない相手の心を動かせるとも思えず苦しい男の心情である。この歌から、「いへばえに」とは、口に出そうとしても言えないけれども、かといつて言えないでいると心の中で思い悩んで苦しむ気持ちを表している。

▽藤原定家の「うらめし」

では、後鳥羽院の歌に大きな影響を与えた藤原定家の用例も検討してみよう。

うらめしやよしなき虫の声さへに人わびさする秋の夕暮

（拾遺愚草 秋 藤原定家）^①

（秋の夕暮れはつまらない虫の声さえも人をわびしくさせるので、恨めしいものだ。）

秋は愁いの季節。虫の音は悲しみを連想させる音である。ただでさえ哀愁を感じさせる季節の夕暮れであるのに、虫の音が一層悲

哀を感じさせる。秋の夕暮れはただの虫の音でさえも人の心を感わしてしまつたため、秋を恨めしく感じてしまつたのである。

おほかたの月もつれなき鐘の音に猶うらめしき在明の空

（拾遺愚草 秋 藤原定家）^①

（有明の月が変わらず出ていることも恨めしく感じられるのに、さらに、暁を告げる撞き鐘の音が聞こえ、恨めしく思う。）

秋すぎて猶うらめしきあさばらけそらゆく雲もうちしぐれつつ、

（拾遺愚草 秋 藤原定家）^①

（秋が終わつてしまい、夜が明けてしまつのがさらに恨めしく思う。私だけではなく空を行く雲もしぐれて秋の終わりを悲しんでいる。）

秋が終わつてしまうことだけでも恨めしいのに、さらに夜が明けるとのはもっと恨めしく感じており、そんな時、空は時雨れていた。時雨が降る様子を涙を流す様子に見立て、秋の終わりの悲しさを嘆いている歌である。参考歌を引用する。

明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな

（後拾遺和歌集 恋 藤原道信）^①

（夜が明けてしまつとやがて日が暮れて、またあなたに会えると知ってはいるものの、そうは言つてもやはり夜明けが恨めしく感じてしまふ。）

夜が明ければ恋人に会えることは自分でも分かっているが、それでもなお、その日の夜明けが恨めしく思ってしまった。藤原定家の歌もまた、夜明けは恨めしく感じてしまうものとして描いているのである。

以上の検討をふまえて、「うらめし」の意味についてまとめる。藤原定家と後鳥羽院の歌における「うらめし」はほとんどが恨めしく思う意で使われていることが分かる。「をし」にも「うらめし」にも、残念であるという、類似した意味があるが、第一節で述べた「をし」と「うらめし」の使い分けの理由にも関わってくるように、後鳥羽院が「人もをし」歌で「をし」と「うらめし」をあえて使い分けたとするならば、「をし」は根底には愛しさがあり、それゆえの物思いをするときの感情で、一方「うらめし」には愛しさの感情は無く、ただ恨めしく物思いをするときの感情だということが分かる。天皇という立場から見た「人」は愛しくも、恨めしくもある存在であるという両極端の思いを表していることを明らかにできた。

三 「あぢきなし」

最後に「あぢきなし」という語について考察する。院の歌の「あぢきなし」は多くの文献が「つまらない」という趣旨で訳している。

しかし、私はこの訳に今ひとつ納得のいかない思いを抱いてきた。このことばの奥にある思いをもっと掘り起こしてみたい。そこで、「あぢきなく」と似た意味を持つ単語「あいなし」「あやなし」「わびし」「わりなし」も調べ、「あぢきなし」でなければ表現できなかった想いについて考察する。さらに、「あぢきなし」と似た意味を持つ単語「あいなし」「あやなし」「わびし」「わりなし」についても意味を調べ、用例と共に和歌全体の後鳥羽院の想いを考察してみたい。

まず、「あぢきなし」とは、上代語「あづきなし」が変化した形で、人の力や自分の心ではどうしようもない状態や、それに対するにががしい気持ち、あきらめの気持ちなどを表す。まず『小学館 古語大辞典』によると、

道にはずれた情けないさま、あるいは麗しくないのを、「あづきなし」、または「あぢきなし」といったことがわかる。中古語としても、この語はどこまでも条理をわきまえず、どうしようもないさまを本義として用いられた。そこから転じて、おもしろくもない、つまらないの意にも用いられるようになる。

と説く。また、『岩波古語辞典』は、

アヅキナシの転。漢文の「無道」「無状」の訓にあてられ、秩

序にはずれてひどい状態が原義。他人の行為を規範にはずれていると批判したり、相手に道理を説いてたしなめたりする意。

自分自身の行動や心の動きが、常軌を逸しているのに自分で規制できないことを自嘲したり、男女の関係の不調について失望、絶望の気持ちを表わす。⁽¹⁶⁾

とある。

次に、「あぢきなし」「あぢきなさ」「あぢきなく」を用いた和歌について検討してみよう。

1. 「あぢきなし」「あぢきなさ」「あぢきなく」

▽あぢきなし

あぢきなしわが身にまさるものやあると恋せし人もどきしものを
(後拾遺和歌集 恋 曾禰好忠)⁽¹⁷⁾

(ああ、つまらない、なさげない。以前は自分自身に勝るものはないと言って恋に落ちた人を非難していたが、今では私が恋に落ちてしまった。)

「わが身にまさるものや」とは、自分自身が一番大事であるという意味である。それを恋に落ちた人に対して思っていたのは、誰かに恋をすれば苦しむのは自分自身であり、恋の苦しみによって命も落としかねないことからである。「もどきしものを」は非難して

いたのに、の意。昔は恋に落ちていた人をただ非難していた自分が今回は恋に落ちる側になってしまったのである。以前の自分身と比べ恋に落ちてしまったことへの自身の情けなさ、恋に苦しむ嘆きを「あぢきなし」と詠っているのである。

▽「あぢきなさ」

咲く花に思いつく身のあぢきなさ身にいた付きの入るも知らずて
(拾遺和歌集 物名 大伴黒主)⁽¹⁸⁾

(身に病気がとりついてしまうことも知らずに、咲く花に執着するのは無益なことである。)

題は「物名」。題の通り「つぐみ」を歌に隠している。咲く花に執着することは無益だと言いながらも、執着してしまう自身の虚しさを感じられる。

▽「あぢきなく」

おもひしる人もこそあれあぢきなくつれなきこひに身をやかへてむ
(後拾遺和歌集 恋 小弁)⁽¹⁹⁾

(分かってくれる人もいるかもしれないのに、つまらないことに、思い通りにならない人との恋に我が身を引き換えるのでしょうか。)

ここでの「あぢきなく」は、思い通りにならないという意で使われている。自分の恋が無情なもので、思っていた

通りにはいかないつまらぬ恋のために、我が身を引き替えなければならぬのかという、薄情な人に恋をしてしまった我が身の虚しさを嘆く。この歌は「題しらず」となっているものの、前後のいくつかの歌が「恋死に」で歌われていることから、この歌もつれない恋と我が身を引き換えることへの嘆きを詠っているのではないだろうか。

あぢきなくいはで心をつくすかなつゝむ人目も人のためかは

(千載和歌集 恋 源光行)⁽²⁰⁾

(恋の思いをあなたに伝えられず、どうしようもなく心を痛めている。人目を忍んでいるのは他人のためであろうか、いやあなただけのためである。)

恋人のためを想って人目を忍んでいるのにもかわらず、つれない恋人への恨みの感情を詠んでいる。「かは」の反語を使うことにより、他人のためではない、貴方だけのために人目を忍んでいるという強い思いを感じる。こんなにも恋人のことを想っているのに、一向につれない態度を取られる自分の虚しさ、どうしようもない自分の思いを「あぢきなし」と表現しているのではないだろうか。

2. 藤原定家の「あぢきなく」

藤原定家の用例はどうであろうか。

これもこれ浮世の色をあぢきなく秋の野原の花の上露

(拾遺愚草 秋 藤原定家)⁽²¹⁾

(人生の華やかな彩どりでさえもつまらなく感じてしまい、飽きてしまった自分の目には、秋の野原に咲いている花の上露がとても儂く、美しいものだと感じるのである。)

「秋」は「飽き」を掛けている。「露」は儂いものとして詠まれることが多い。現世の色あるものへの空しさを詠んだのだ。私は、ここで「あぢきなく」を使うことで、現世の色あるものだけでなく、それらが空しいものに見えてしまう自分の目や我が身の虚しさも表現しているのではないかと考えている。

あぢきなくつらきあらしの聲もうしなど夕暮にまちならひけん
(拾遺愚草 秋 藤原定家)⁽²²⁾

(まるでつれないあの人のような烈しい風の音もつらく、うとましく感じてしまう。どうして私は夕暮れには人を待つことが習慣になってしまったのだろうか。)

ここでの「あぢきなく」は訪れなくなってしまった恋人に対してや、薄情な恋人を連想させるあらしに対して言っているようにも思えるが、無くなってしまった恋人はもう自分のもとへ訪れにくれなくなってしまった、冷淡になってしまったと感じているものの、どうしても思いを捨てきれず、恋人の訪れを待つてしま

女性の心を読んだ歌である。もう訪れが無くなった恋人を待ち続ける自分のむなしさは、まさに「あぢきなし」と表せるであろう。

あぢきなく心に秋はとまりいゝるながむるのべの霜枯れぬらん
(拾遺愚草 秋 藤原定家)⁽²³⁾

(つまらないことに、私の心では秋がずっと止まっていて、私は人々に飽きられ、じつと物思いにふけて眺める野辺は霜枯れてしまい、人の訪れも枯れて(無くなって)しまったの
 だろう。)

男に捨てられた女性の歌である。「秋」と「飽き」、「枯れ(かれ)」と「離れ(かれ)」を掛け、とどまる秋、飽きられる自分、霜枯れる野辺、離れた訪れ。これらを感じる心のむなしさ、飽きられ、訪れの亡くなった悲しみを受ける我が身と心を「あぢきなし」と表現したのである。

あぢきなく物思人の袖のうへに有明の月の夜をかさねては

(拾遺愚草 恋 藤原定家)⁽²⁴⁾

(心が樂しまず、物思いに沈む人の袖に宿る涙の上に、有明の月の光が差し、さらに、一人寂しく過ごすことを幾夜も重ねたらどれだけ悲しいことであろうか。)

「かさね」には、涙の上に有明の月の光が重なる様子、恋人に会えない一人の夜を重ねる様子、そして恋人と袖を重ねられないと

いう複数の意味が込められている。一人寂しく夜を越さなければならぬことへのつまらなさ、そして恋人と袖を重ねられない我が身の虚しさを詠った歌である。

3. 後鳥羽院の「あぢきなく」

あぢきなくながきかたみのつらさゆゑ君にとめてしわが心かな
(後鳥羽院御集 恋 後鳥羽院)⁽²⁵⁾

(どうしようもない長い片思いのつらさのせいで、あなたに私の思いをとめてしまったことだ。)

あなたへの強い思いは、長年の片思いによつて積もり積もつてしまったつらい思いによつてのみ保たれてしまつていと述べている。もうどうしようもない片思いに対して「あぢきなく」と述べることも、そのようなどうしようもない片思いでしか保たれない自分の虚しさを表現しているだろう。

うき人をしのぶの衣あぢきなくつれなき色になにみだるらん

(後鳥羽院御集 恋 後鳥羽院)⁽²⁶⁾

(冷たい人进行いしのぶ衣(信夫摺のちぢずりの文様)はどうして、どうしようもなくつれない色に乱れてしまうのでしょうか。)

「しのぶの衣」とは摺り衣の一種で、摺り衣の模様は乱れ模様になるところから、「摺り衣」からは「乱れ」を連想させる。また信夫

郡産のしのぶ摺りは特に乱れ模様が際立つものだったため「しのぶもぢ摺り」とも言われている。この歌ではさらに「しのぶ」に「偲ぶ」を掛け、忍ぶ自分の乱れる心、そして心が乱れる自分の虚しさも表現している。

「あぢきなし」のバリエーションである「あぢきな」の「あぢきな」といった、活用形などの用例についても検討しよう。

こもり江の蘆の下葉のうきしづみ散りうせぬよのあぢきな
身や (拾遺愚草 冬 藤原定家)

(隠り江の蘆の下葉は、浮いたり沈んだりしているが、散り失せてしまうことはない。我が身もその下葉のようなものだが、ああ、つまらない世の中であることよ。)

題は「寒蘆」。「隠り江」とは、深く入り組んでおり、全体を見るのができない入り江のこと。「散り失せぬ」とは、『古今和歌集』の仮名序の「松の葉の散り失せずして」からきている。

青柳の糸絶えず、松の葉の散り失せずして、真拆の葛長く伝はり、鳥の跡久しくとどまれば、歌のさまを知り、ことこの心を得たむ人は、大空の月を見るがごとくに、古を仰ぎて今を恋ひざらめかも。²³⁾

「よ」は、蘆の節を「よ」と読むことから、縁語を使い「世」を掛けている。下葉に喩える我が身の空しさ、世のつまらなさを感じ

る歌である。

あぢきなきをちかた人の時鳥それともわかぬ野へのゆふぐれ
(拾遺愚草 秋 藤原定家)

(夕暮れの野辺の遠くの方で鳴いているほととぎすの声は、確かにほととぎすの声であると区別することができないので、つまらなく思えてしまう。)

ここでは「をちかた人」の「人」とあるが、この歌はほととぎすを人に擬して詠んでいる。遠いので区別できないことへのつまらなさ、空しさを表現している。

歌の多くが「あぢきなく」「あぢきなし」を用いているが、中には少数だが「あじきなや」「あじきな」の「あじきな」の歌も存在する。後鳥羽院は「あじきなく」と「あぢきなき」「あぢきなや」を使っているが、藤原定家は「あじきなく」「あぢきなし」「あじきなき」「あじきなや」「あじきな」の五種類使っており、さらに「物思い」や「身」「命」「世」「秋」を合わせていることが多い。後鳥羽院も「人もをし」の歌では「あじきなく」の後に「物思ふ」と「身」、そして「世」を使っている。

次に「あぢきなし」の現代語訳として用いられることが多い「つまらない」の意に近い単語「あいなし」「あやなし」「わびし」「わりなし」のそれぞれの意味を挙げ、後鳥羽院、藤原定家が詠んだ

歌の用例と共に「あぢきなし」との使い方の違いを見ていく。

「あいなし」とは『小学館 古語大辞典』によると、

- ①意味がない。いわれがない。無益だ。②心に満たない。不本意だ。おもしろくない。③訳もなく。いいようもなく。むやみに。⁽³⁰⁾

とある。②が特に近い意味であろう。

「あやなし」とは『小学館 古語大辞典』によると、

- ①筋が取らない。理屈に合わない。②理由がない。いわれがない。③無意味だ。つまらない。かいがない。⁽³¹⁾

とある。③が特に近い意味だろう。しかし、①の理屈に合わないという意も近いように思える。

「わびし」とは、『小学館 古語大辞典』によると、

- ①つらい。②せつない。つらい。③寂しい。心細い。頼りない。④心が満たされない。つまらない。おもしろくない。興ざめだ。嫌になる。⑤当惑するさま。⑥貧しい。みすばらしい。⑦物静かだ。閑寂だ。⁽³²⁾

とある。①の中の④の意味が特に近い。

「わりなし」とは、『小学館 古語大辞典』によると、

- ①道理や理性が通用しないさま。分別がない。②するすべがなく、途方に暮れるさま。どうしようもない。③やむを得ない。

しかたがない。余儀ない。④どうしようもなくつらい。耐えがたい。難儀だ。⑤はなはだしいさま。一通りではない。⑥なんともすばらしい。言いようのないほどよい。⑦無理だ。むやみだ。⁽³³⁾

とある。直接的なつまらない意は無いが、①や②は「あぢきなし」に近い。その用例を挙げる。「あいなし(あひなし)」は後鳥羽院も藤原定家も一首も詠んでおらず、『小学館 古語大辞典』にも「あいなし」は散文に用いられ、歌に用いられることはまれである」と書かれていたため、「あいなし」は当時の後鳥羽院や藤原定家が「あぢきなし」と区別するものではなかったと考える。次に「あやなし」である。「あやなし」は後鳥羽院のみが使用しており、藤原定家の歌では使われていなかったため、後鳥羽院の歌のみを引用する。

けふこそは秋の日数もくれはとりあやなし名のみなが月の空
(後鳥羽院御集 秋 後鳥羽院)⁽³⁴⁾

(はかなく秋が暮れていつてしまい、長月という名ばかりがとも残念でつまらなく感じることだ。)

「くれはとり」は「あや」の枕詞であり、「暮れ」を掛けている。暮れていつてしまう秋の悲しさを詠んでいる。

次に「わびし」である。『後鳥羽院御集』、『拾遺愚草』から引用

する。

庭の松にあらし吹きこぬ夕日に深山のおくはさぞわびしき

(後鳥羽院御集 隱名 後鳥羽院)

(庭の松の木に風が吹き込んだときでさえつらかったので、深山の、さらに奥の方はさぞかしつらいことだろう。)

すでに山家に住む身でありながら、さらに奥深い場所を目指す歌である。「わびし」は「つらい」の意で、「さぞ」はさぞかしの意である。

「なび」とあることから、すでにつらい思いを感じており、さらなる嵐のつらさの心配をしていることが分かる。

『伊勢物語』でも「あぢきなし」の用例がある。

むかし、いやしからぬ男、われよりまさりたる人を思ひかけて、年経ける。

人しれずわれ恋死なばあぢきなくいづれの神になき名おほせむ⁽³⁶⁾

自分がどのくらい恋に思い悩んで死んだとしても、世の人々はそれを知らないで、何かの祟りであろうかと噂をするだろう。そのことがつまらなくもあり、同時に誰にも告げずに恋死ぬ自分が虚しいものであるという意味ではないだろうか。

さらに、『源氏物語』の次の箇所は特に後鳥羽院が「あぢきなし」を意識しているのではないかと言われている。

身を棄ててとぶらひ参らむにも、何のかひかはと思ふにや、かかるをりは、人わろく、恨めしき人多く、世の中はあぢきなきものかなとのみ、よろづにつけて思す。⁽³⁷⁾

(我身をなげうつてお見舞いに参ったところで何があるうかと思うからなのであるうか、こうしたときには、人目に見苦しく、恨めしいと思ってしまう人も多く、世の中はどうにも情けないものだ。とすべてのことにつけて源氏の君はお感じになつている。)

厭わしい世の中、自ら須磨へ行くことを決めたものの、寂しさは一層増すばかりで、今まで光源氏のもとにいた人々も、源氏が須磨に行くこととなると、もう傍にはいない。そのことに対し、源氏は「世の中はあぢきなきものかな」と感じられるのである。

後鳥羽院は『源氏物語』のこの箇所を踏まえ、天皇である自分は源氏の君のように、ただ「人目に見苦しく、恨めしき人多く、だからこそさらに世の中はともなげないものである」とは思わず、世の中の不甲斐なさを感じつつも、多くの人臣と世を見つめて、

人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑにもの思ふ身は

と、世の中だけでなく自身の想いも込めながら、詠んだのではな

いだらうか。

宮武利江氏の「あぢきなきの基本的語義」論⁽³⁸⁾では、『枕草子』と『源氏物語』で用いられている「あぢきなく」について考察している。『源氏物語』についての考察の中で次のように述べる。

まず、「あぢきなき」と、連体形で直接修飾する語句としては、「こと」が八例、「もの」が四例、「世」が二例、それ以外が五例あるが、じつは「もの」の四例もすべて「世（の中）」を指している。ほかにも、文脈上「世」を「あぢきなし」としていると考えられる例を合わせると、一一例にのぼる。

「世」以外に「あぢきなし」が修飾する体言に、「すき心」「身」があり、これはどちらも源氏が自分自身のことについて考えたり人に述べたりしたものである。

また、

「あぢきなし」は、思わず口をついて出る「我ながらどうすることもできない」という弱気な反省、諦念に至る前のやや自虐的な自己批判。

「事が自分の思うようでない」と言うことが、「あぢきなし」の基本的語義である。

とあり、結論として

「あぢきなし」の基本的語義は、「事が（自分の）思うようで

ない」ということ。

と述べている。「我ながらどうすることもできない」そして「弱気な反省、諦念に至る前のやや自虐的な自己批判」は、藤原定家や後鳥羽院の歌からも読み取れるものであった。藤原定家や後鳥羽院などの歌での「あぢきなし」は、対象とするものに対して「つまらない」「どうしようもない」と訳されることが多いものの、歌を読み解いていくと、宮武利江氏の「自己批判」に近いように思う。『源氏物語』の「あぢきなし」も、「我ながらどうすることもできない」「自分の思うようでない」そして「諦念に至る前のやや自虐的な自己批判」を表す語であるのならば、後鳥羽院が『源氏物語』の須磨の段の「あぢきなし」を意識していたということにも納得できるであろう。

「あぢきなし」についてまとめると、「あぢきなし」は「どうしようもない」という思いや「つまらなさ」を表しているが、表す対象が一つとは限らず、その歌の主人公となる人物（詠み人など）自身のどうしようもない虚しさや絶望感、行き場のない感情を表現している。しかし、「あいなし」などの単語はいずれもどうしようもない、つまらない意を持つ単語ではあるものの、藤原定家や後鳥羽院は特定の対象のもののみを表現していたことが分かる。このことから、後鳥羽院の「人もをし」の歌では、自身の生きる

世の中をつまらなさだけでなく、人を愛しく思ったり、恨めしくも思ったり、物思いをしてしまう我が身のつまらなさや虚しさの感情も伝えたかったのではないだろうか。鎌倉幕府と対立し、我が身の立場から人を愛しく思う時もあるれば、恨めしく思ってしまう時もある。そのような物思い、思い悩みは後鳥羽院の立場だからこそのものである。後鳥羽院は当時の自身の立場に苦しみながら詠んだのだとすれば、この歌は世の中をつまらなさだけではなく、自身の虚しさを表現した歌だと言えるのではないだろうか。

おわりに

本稿は、『百人一首』の後鳥羽院の歌「人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑにもと思ふ身は」の考察をすることによって、藤原定家が数ある後鳥羽院の歌の中からこの歌を選んだ理由を導き出すことを目標として論じてきた。

「をし」は、愛しい思いに基づいて、もつたいない、手放したくないという思いが込められている。和歌ではただ「愛しい」という意で訳されていることが多いため、似たような意を持つ「かなし」についても考察した。「かなし」は愛しいという思いと、悲しいという思いの二つの意味を持っていた。後鳥羽院の「鳴きよはる野原の虫の声聞けばわが身の秋ぞいとあぢきなし」の歌の「か

なし」は、本歌や参考歌から、秋との別れの寂しさと、秋の季節の愛しさの両方を詠っていることが導き出せた。秋は哀愁の季節でもあるが、同時に愛すべき美しい季節でもある。これは「愛しいからこそ悲しさ」とはまた別の意味である。もちろん、秋が愛しいからこそ、秋との別れが悲しいという思いを詠った歌も多く存在する。しかし、この「かなし」の用例では二つの意味を含めた単語として用いられているのである。よって、「をし」と「かなし」では意味が変わってきてしまう。

さらに、後鳥羽院は和歌の中で「人」を「をし」だけでなく「うらめし」とも詠んでいる。「をし」と「うらめし」には「残念だ」という似た意味があるが、あえて後鳥羽院は「をし」と「うらめし」を区別している。この区別の理由を探るため、「うらめし」について調べた。意味と用例から「うらめし」は相手や物を恨めしく思う意で使われていることが導き出され、どの歌にも「愛しい」などの意は含まれておらず、「をし」との違いが明確に見られた。後鳥羽院は「人もをし」歌のなかで「人」に対して物思いをしてしまふと述べているが、その「人」への物思いの区別こそが「をし」と「うらめし」なのである。「をし」の物思いの根底には愛しさがあり、一方で「うらめし」の物思いには愛しさの感情は無く、恨めしい感情のみが込められている。「あぢきなし」については、た

いていが「つまらない」「どうしようもない」という意でのみ訳されていること、「つまらない」「どうしようもない」という意を持つ単語は他にも存在するのに、なぜ「あぢきなし」のことがばを用いたのかということに疑問を持ち、意味や用例から「あぢきなし」でなければ表現できなかった後鳥羽院の心情について考察した。主に撰者となった藤原定家と後鳥羽院の用例が多くなったが、他の「つまらない」の意の単語を用いた和歌は、用例から対象の人物や物、情景のみを詠っているのに対し、「あぢきなし」は対象の人物や物、情景だけでなく、それらをつまらないと感じる自分自身をつまらなさをも詠んでいることが分かる。このことから、「人もをし」歌では、人が愛しくも、恨めしくも思うが、つまらない世の中で物思いしてしまう自分自身こそがつまらなく虚しい、という思いを表白しているのだ。

「あぢきなし」について、多くの歌から自身の虚しさを感じたとき、行き場のない何とも言えない感情は「あぢきなし」でしか表現できないものであることを導き出すことができた。

最後に、藤原定家が『百人一首』の後鳥羽院の歌に「人もをし」の歌を撰んだ理由は、天皇と言う立場にあつて壮絶な人生を歩み、我が身の虚しさを感じつつ、後世に怨霊として人の記憶に生き続ける院の生涯を表す歌として最もふさわしいと感じたからである

という結論を再度ここに記しておきたい。

- 注
- (1) 中田祝夫・和田利政・北原保雄『古語大辞典』(一九八三年 小学館)
 - (2) 中田祝夫・和田利政・北原保雄『古語大辞典』(一九八三年 小学館)
 - (3) 寺島恒世『後鳥羽院御集』(一九九七年 明治書院)。現代語訳もこの書に負う。
 - (4) 片野達郎・松野陽一『千載和歌集』(一九九三年 岩波書店)
 - (5) 小沢正夫・松田成穂『古今和歌集』(一九九四年 小学館)
 - (6) 小沢正夫・松田成穂『古今和歌集』(一九九四年 小学館)
 - (7) 中田祝夫・和田利政・北原保雄『古語大辞典』(一九八三年 小学館)
 - (8) 寺島恒世『後鳥羽院御集』(一九九七年 明治書院)
 - (9) 寺島恒世『後鳥羽院御集』(一九九七年 明治書院)
 - (10) 寺島恒世『後鳥羽院御集』(一九九七年 明治書院)
 - (11) 片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』(一九九四年 小学館)
 - (12) 久保田淳『訳注藤原定家全歌集』上巻(一九八五年 河出書房新社)
 - (13) 久保田淳『訳注藤原定家全歌集』上巻(一九八五年 河出書房新社)
 - (14) 久保田淳『訳注藤原定家全歌集』上巻(一九八五年 河出書房新社)
 - (15) 藤本一恵『後拾遺和歌集全釈』下巻(一九九三年 風間書房)
 - (16) 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎『岩波古語辞典 補訂版』(一九

九〇年 岩波書店)

- (17) 藤本一恵『後拾遺和歌集全釈』下巻(一九九三年 風間書房)
- (18) 小町谷照彦『拾遺和歌集』(一九九〇年 岩波書店)
- (19) 藤本一恵『後拾遺和歌集全釈』下巻(一九九三年 風間書房)
- (20) 片野達郎・松野陽一『千載和歌集』(一九九三年 岩波書店)
- (21) 久保田淳『訳注藤原定家全歌集』上巻(一九八五年 河出書房新社)
- (22) 久保田淳『訳注藤原定家全歌集』上巻(一九八五年 河出書房新社)
- (23) 久保田淳『訳注藤原定家全歌集』上巻(一九八五年 河出書房新社)
- (24) 久保田淳『訳注藤原定家全歌集』上巻(一九八五年 河出書房新社)
- (25) 寺島恒世『後鳥羽院御集』(一九九七年 明治書院)
- (26) 寺島恒世『後鳥羽院御集』(一九九七年 明治書院)
- (27) 寺島恒世『後鳥羽院御集』(一九九七年 明治書院)
- (28) 小沢正夫・松田成穂『古今和歌集』(一九九四年 小学館)
- (29) 久保田淳『訳注藤原定家全歌集』上巻(一九八五年 河出書房新社)
- (30) 中田祝夫・和田利政・北原保雄『古語大辞典』(一九八三年 小学館)
- (31) 中田祝夫・和田利政・北原保雄『古語大辞典』(一九八三年 小学館)
- (32) 中田祝夫・和田利政・北原保雄『古語大辞典』(一九八三年 小学館)
- (33) 中田祝夫・和田利政・北原保雄『古語大辞典』(一九八三年 小学館)
- (34) 寺島恒世『後鳥羽院御集』(一九九七年 明治書院)
- (35) 寺島恒世『後鳥羽院御集』(一九九七年 明治書院)
- (36) 片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』(一九九四年 小学館)
- (37) 阿部秋生・今井源衛・秋山虔『源氏物語』(一九四四年 小学館)
- (38) 宮武利江『あぢきなし』の基本的語義『文学部紀要』二十(二〇〇六年 文教大学)

(二〇一七年度卒業)